特集・新しい川づくりをめざして(1)

川づくりの多自然化と風景としての多様性

楨村久子*

1. ドイツの川づくりにおける自然保護と法律から

ドイツの今日の自然保護及び河川改修の目標として、自然、又は近自然の河川湖沼の保全、河川湖沼の自然再生、近自然の河川湖沼の新たな創造があげられている。アレクサンダー・シンク氏の「ドイツの法律による自然保護と川づくり」、クリスチャン・クラウゼ氏の「川づくりにおける自然保護と自然地保全」など日独河川技術シンポジウムから、日本の川づくりの多自然化と風景としての多様性を連想してみたい。

2. 日本の「生々流転」の風景

「生々流転」という横山大観が描いた39メートルにもおよぶ水墨画がある。人影もない山中に結んだ雨露が、梢からしたたって、大地を潤し、やがて谷川にを注いで流れるところに始まる。それは水かさを増して、山を下り、里を横切り、町を過ぎて行く。ついに大きな川の流れは、河口から大海に達する。水の旅はここで終わったかに見えるが、さらに続く。竜巻を起こして空に上り、再びもとの山に帰っていく。

人々がこの流転する水の一生に心惹かれるのは、ただ水の流れだけが描かれているのではないところにある。水滴の滴る梢、険しくそびえる岩壁、木立や家、荷車を引いて橋を渡る人、穏やかな岸辺に流して春風にそよぎ、川面に映る木の枝振り。秋風にさわぐ水の姿など、四季折々の川が、人の世と重なって描かれ、人の心に風景としてあるからである。

人々の心に抱く日本の川は、山の溪流に始まり、海に注ぐという原風景の連続性をもっている。川は川としてだけあるのではなく、周辺と一帯の系としてあり、それは自然や人間の生活、地域の文化を包み込んだ風景として捉えられる。生々流転の絵からも見られるように、川は、山の溪流、農村の田園風景、都市河川、そして海に

注ぐ河口、ときには湖沼としてある。溪流は森林と一体の風景としてある。春の新緑、秋の紅葉と、豊富な植物層によって四季の変化は人々を溪流へと誘っている。

水田は用水路やため池、また集落と一体である。水田や用水路は身近な水生動物をつかまえる子どもたちの格好の遊び場である。また稲の育っていく風景には背景として里山があり、松林や雑木林のやぶは鳥や昆虫などのすみかとなり、四季のさえずりを聞かせてくれる。

湖沼は、例えば大きな湖沼では漁業や水生動植物はもちろんのこと、水面の背景の山並みの四季の変化と一体に捉えられる。

都市河川は、ビルの林立する建築物の中に開放感を与えるが、河川とビルをつなげ、生命感を与えるものは並木などの樹木である。また神社の船渡御など祭りなどの伝統行事とともに河川はある。

河口では海の水平線とつながる広大なオープンスペースとしてある。人々の広大な空間への渴望を満たしてくれる。都市部では港のにぎわい、また白砂青松の砂浜と海浜植物の水辺は、水遊びの楽しい場所でもある。

このように、日本の場合河川は上流から下流にいたる多様な自然は人々の生活の関わりの中で多様な風景を創り出してきた。川の自然の多様性は風景の多様性として捉えられる。

3. 時間変化と四季の変化の風景の創造

「環境影響評価が行われるときには、環境に対する全体的な影響、すなわち環境要素としての動植物、土壌、水、大気、気象、景域、そしてそれぞれの相互関係が検討されるべきである。河川改修を許可する決定の際には、その環境影響評価の結果を考慮しなければならない」と述べられている。専門家でないふつうの人々や住民はこれらの環境要素を風景として捉え、自分自身の五感を通して判断している。上記で述べたように、近自然の河川湖沼の保全、自然再生、近自然の河川湖沼の新たな創造を考えると、風景として計画することが人々の河川湖沼への関心と重要性の認識へと誘うと考える。

*奈良文化女子短期大学
Hisako MAKIMURA

そこで環境影響評価の結果で河川改修がされる場合、河川湖沼の風景計画として基本的な考え方では、①周辺の自然・人文・社会的条件等の特性を活かし、地域の個性を表現する、②伝統的な風景の見方や見せ方、演出の手法を活用する、③四季や時間の変化、五感を動員する風景体験ができる風景づくりをする。

時間変化と四季の変化の創出では、光を見る、影を見る、気象の視覚化、四季の風景、経年変化、人の動くさま、歳時記、過去の風景の再現等の視点から風景の計画が考えられる。

「光を見る」では、水面の反射や鏡像、夜には月の出を計算に入れた風景や、月見の場所をつくる。「影を見る」では、川面や湖沼の水面に落ちる影の変化や樹木自体の影の変化を、「気象の視覚化」では川面の霧、雨水の流れゆくさまなど、「四季の風景」では水辺の草木や渡り鳥、土手の野焼きや花木、水面と一体となった山並みの新緑や雪。「経年変化」では歴史を感じる巨木やコケ蒸した岩。「人の動くさま」では橋を行き交う人や船の航行。「歳時記」ではその地域の祭りや行事、農村では農作業。「過去の風景の再現」ではそれぞれの時代の懐かしい、当時の生活と思想に密接に結びついたものがある。

人間の五感を全て使って評価や近自然の再生に動員することも大切である。視覚の評価だけでなく、聴く、触れる、香り、味わうの点から新鮮な空気、安全で美味しい水、清冽な水の音、子どもが水遊びできるきれいな水などから河川湖沼を評価し、そのような近自然を再生したい。

4. 人々は川とどのようにかかわるのか

・侵害規制法についての環境アセスメントと住民参加

さて環境が改変される場合、ドイツの開発プロジェクトでは市民がどのように関わることができるのだろうか。その手続きは次のようである。第一に許可を与える担当官庁が新聞に掲載する。開発を行わせる地域で手続きをするために周辺地域の人に情報を与える必要から、市民が計画や書類も入手できる状態でなければならない。次に告知の一週間後に4週間書類を閲覧することができる。これは周辺住民だけでなく全ての人が対象である。第三に4週間の後、プロジェクトに意見を述べる人は4週間以内に異議を申し立てることができる。関係官庁に書簡を送るか、官庁に出向いて意見を述べる。この段階では市が開発した特別の様式の書類に簡単に主な理由について述べるだけである。廃棄物の処理施設では2000人から意見があった。第四に市民との討論が必要で、意

見提出した全ての人が公開討論会に招待される。指摘した問題の解決法を見いだそうと、市民、開発業者、許可官庁の間で話し合われる。3日から5日以上もかかるものもある。討論会では団体が弁護士を雇って意見を述べる場合も多い。自然再生や河川改修では解決しやすく、代替え案を見いだすことが多い。さらにドイツで始まっているものに、モニタリング（監視）のシステムがある。プロジェクトに反対する人が事業の初めから関わることの方が、計画が完成してから意見を言っても、また実際できあがってからでは変更はむずかしい。そのため事業の初めから市民に関わってもらうことが重要だと考えられているのである。例えばある川の場合、まず計画を生態学的な観点から立てたプロジェクトに関心のある農家の人らが集まり討論し、計画の申請前に解決策を見いだしたという。

・時間経過そのものに価値を置くライフスタイルへの転換と河川環境整備

ドイツでは、自然、または近自然の河川湖沼はほとんどなくなってしまった。「ドイツでは河川湖沼の生態系機能の現状の評価は、われわれを正気に返らせる」という。それが、わずか1.5%にまで減った人為のない自然地を、15%を近自然にもっていきたいという。日本の河川湖沼は上流から下流までこれまで林業、農業、漁業や都市の生産と結びつき、人々の日常生活と結びついた風景として捉えられ、その中で人々は関心を持ち、水環境を維持管理してきた。しかし農林漁業が衰退し、生活基盤整備が進む中で、実際上は人々の河川との関わりは無くなってしまった。では人々とどのようなかかわり方があるだろうかと考えれば、直接の生産との関わりを離れてしまった今、遊びの中でしかかかわることができないだろう。溪流の紅葉狩り、桜堤での花見。魚釣りや水鳥のウォッチング、水遊びやカヌー、河畔の木々の道の散歩、水面に浮かぶ山の姿、ベンチに腰掛けておしゃべりを楽しむ、など。その中で人々はシンク氏の言葉を借りれば「河川湖沼の現状評価に正気になる」だろう。関わりを失った河川は、他人まかせになる。子どもも大人も遊びの中から、市民参加の川づくりが始まる。人と川の隔離から関係性を取り戻すには、客観的「景域」にさらに人々がかわり感情を表現する「風景」としての河川環境の整備が必要であろう。川づくりの多自然化は風景としての多様性を生んでいく。また風景としての多様性を求めることが川づくりの多自然化につながる。近自然への再生の本当のねらいは、時間経過そのものに価値がおかれる社会やライフスタイルへの転換ではないだろうか。